

第17回むつ市総合教育会議議事録

開催日時： 令和3年9月8日（18：30～20：30）

開催場所： むつ市役所 教育委員会会議室

出席者： 宮下 宗一郎 市長
阿部 謙一 教育長
田中 志昌 教育委員
納谷 順子 教育委員
黒木 和之 教育委員
長岡 俊成 教育委員

事務局	教育委員会	角本	教育部長
		鷺岳	政策推進監
		工藤	教育委員会総務課長
		祐川	副理事（学校教育課長）
		櫻井	副理事（図書館長）
		畑山	生涯学習課長
		木村	中央公民館長
		金浜	川内公民館長
		二本柳	大畑公民館長
		山崎	脇野沢公民館長
		新田	総務課主幹
		庵原	総務課主査
		関	総務課主任

1. 開会

事務局： 定刻となりましたので、ただ今から、第17回むつ市総合教育会議、教育講演会、高宮敏郎氏講演会を始めさせていただきます。

本日は、市民の皆様と御一緒に講演会を聴講していただくため、この模様は、YouTube むつ市長の62チャンネルでライブ配信をさせていただきます。

本日の講師には、サピックス代ゼミグループ共同代表、学校法人高宮学園代々木ゼミナール副理事長高宮敏郎氏をお迎えし、「教育改革のゆくえと子ども達に求められる力」と題して御講演いただきます。

講演に入ります前に、むつ市総合教育会議議長であります、むつ市長 宮下宗一郎より挨拶がございます。

それでは、宮下市長お願いいたします。

宮下市長： 市民の皆様こんばんは。この時間にですね、ライブ中継をすると、もういつものコロナの会見かという風に思う方もいらっしゃるかもしれませんが、今日は教育のお話をさせていただきますと思っています。総合教育会議というものをむつ市は今やっております、これ何かと言うと、むつ市の教育の大きな方針、それから道しるべになる教育大綱というものを今作っています。市長である私と、それから教育長、教育委員会の教育委員の皆様で構成した会議で、今、この教育大綱を作っているということでもあります。

そういうことで、この新しい、五年ぶりにこれをさらに新しくするというので、この改革をしている最中だということでございます。ただ、こうして改革をするということなんですけれども、私たちだけでこうなんて言うんですか、密室の中で、閉じこもって限られた知見で改革と言っても、たかが知れているだろう、という

こともありまして、今回は全国でご活躍の教育関係者の皆さま、高い知見をお持ちの皆様からご意見を伺いながら、このむつ市の今後進むべき教育の方向性を今検討している最中でありませう。

第1回目は学力向上の観点から、百マス計算で有名な陰山先生のお話を伺いました。第2回目はグローバル教育、それから人材育成としての教育という観点から八戸学院大学の元学長さんで、インフィニティ国際学院理事長の大谷先生からお話を伺いました。今日第3回目ということで、日本の大手予備校の一つである代々木ゼミナール、普段は我々代ゼミ代ゼミと呼ばせてもらっていますけれども、代ゼミさんの副理事長であります高宮敏郎様を迎えて、教育改革の行方と子供達に求められる力と題して、受験を取り巻く環境の変化や大学入試から逆算して子供達に今求められている力についてご講演をいただく予定となっております。むつ市内で大学を目指している子供達、それから保護者の皆さん、さらには学校関係者という意味ではもう必見の内容となっておりますので、どうぞお楽しみにしていただければと思います。60分程度ご講演いただいた後に、私どもとディスカッションも行う予定ですのでよろしく願いいたします。高宮先生、今日よろしく願いいたします。

事務局： 出席者紹介
(市長ほか)

事務局： それでは、講演に移らせていただきます。

本日の講師であります、高宮敏郎氏をご紹介します。

高宮(たかみや)先生は、1974年、東京に生まれ、慶應義塾大学経済学部卒業後、三菱UFJ信託銀行の前身であります三菱信託銀行に入社しました。

2000年4月、祖父が興した学校法人高宮学園に入職され、その年の9月からアメリカ合衆

国ペンシルベニア大学に留学され、2005 年教育学博士号を取得され、2009 年からは現職に就かれました。

ほかに、サピックス小学部などを展開する株式会社日本入試センター代表取締役副社長、オンライン英会話スクールを運営する株式会社ベストティーチャー代表取締役社長などを兼職されております。

また、むつ市において実施されております「まさかり高校」事業にも御協力いただいております。

本日は、「教育改革のゆくえと子ども達に求められる力」との演題でご講演いただきます。

それでは、高宮先生よろしく申し上げます。

2. 講演

はい。ただ今ご紹介いただきました高宮でございます。今日は貴重な機会をいただきまして本当にありがとうございます。お話の前に、まず今回延期になってしまった災害に対しましてここよりお見舞いを申し上げます。一日も早くですね。ご復興されることをご記念申し上げますと共に、この貴重な機会をいただきました宮下市長様に本音を申し上げてそしてご視聴の皆様には感謝申し上げたいなという風に思います。

今日は60分時間をいただきまして、あの色々お話ししたいことがあってスライドが90枚ほどになってしましまして、ちょっと駆け足になってしまうかもしれませんが、最後までお付き合いをいただければなという風に思います。

教育改革の行方という風に自らタイトルを付けたんですけども、この教育を語る難しさというのがございまして、一つは科学的視点でお話しできればと思っています。

簡単に、科学は何かと言うとですね、因果関係を証明することではないかなという風に思っています。こうだからこうなる。原因がこう

なので結果としてこうなる。ところが教育の場合は要素が多くてこの因果関係が複雑なので、科学的に証明解明するのが難しい。そして数字で評価するのが難しい分野なんだろうなという風に思っています。学力テストの点数あるいは経済的な価値に置き換えるということが非常にやりづらいことなのかなという風に思っています。そして教育の効果というのは、非常に長く継続しますので、これもまた計測の仕方が難しくなっているんだろうなという風に思います。そして、もう一つ比較実験をして因果関係を表明するというのはよくある手法なんですけど、これを教育で実施するのは非常に難しい。同じようなグループを二つ作って、こちらにはAのグループにはこうする、Bのグループにはこうする。で、場合によってAの方が効果的だということがある程度予想されてるような時に、Bにはそれを与えないで、Aにだけ与えるというのが倫理的に許されるのか？ということ、生徒子供達を対象にした実験というのは非常に組み立てが難しい。こういう事情があって科学的にこの教育を語るという難しさがございまして。もう一つ、人にまつわる部分で、これを赤裸々に今日語ることがいいのか？どうか？迷ったんですけども、率直にお話をさせていただければなという風に思います。一つは政治的にプレッシャーがかかる、何かあると政治家の皆様から色々言われるということが起こりやすい分野だという風に理解をしています。そして、厄介なのが、有識者の一家言ということで皆さま教育には一言思いがあるで、改めてちょっと辞書で一家言引いてみましたけども、後者のですよね形式のある意見まあこれを期待して有識者の皆様に教育を語っていただくんですがややもするとその人独特の主張論説、え？そしてそれが個人の経験に基づく場合が多くて、これを集約するのが非常に難しいというところがございまして。そして、実はこの一家言持っているのが有識者だけではなくて、言ってしまうと全ての大人が教育を受けあるいは保護者として教育に携わる、

経験を持つことがある。そうすると一億総教育評論家、批判家、誰もが何か言ってやりたいって。こういう中で教育を語る難しさがあるのかなという風に思っています。そして、さらに話がややこしいのがコミュニティー、セグメントという言い方をしてもいいかもしれないですが、それによってですね教育の考え方が全然違ってくる。そして、それぞれのコミュニティーの中には同調圧力がかかりやすいという問題がございます。例えば、家族での会話でみんなこういうところに行ってるのよ、こういうところやってるのよ。ややもするとそのみんなというのは三人だったり、インフルエンサーの一人が言ってるだけというケースもございます。まあこういう難しさの中で教育改革を語らなければいけないということで、最初から言い訳じみたお話になるんですが、なるべく客観的なお話をしたい。普段心がけておりますがどうしても個人の経験に裏打ちされたある種のバイアス、あるいは塾予備校経営してる立場からのポジショントークがあるということをお許しをいただければなという風に思います。個人的な経験がやはり教育を語る上で非常に大きな要素になりますので、ちょっとですね脱線しつつ自己紹介あるいはお仕事の話を中心にさせていただければなという風に思います。全体としてはこういう流れで進めてまいります。

ご紹介いただきましたように1974年昭和49年の生まれでございます、団塊ジュニアという世代になります。団塊ジュニアというのは親世代が団塊世代。この世代は一学年が270万人前後おりました。そして、その子供達の世代が1971年から74年で200万人を超える世代でございます。そこから少子化が進んできているということは皆さまご案内の通りだと思います。直近のですね、子どもたちの出生数見ますと、2020年で84万人ということで、我々の世代はえ200万人いるんですが、生まれてくる子供達はあその4割ぐらいだということで、非常に大きな構造的な変化が起こっ

ているということがお分かりいただけるんじゃないかなという風に思います。

祖父が予備校を起こしたんですけれども、私自身は実は大学受験をしておりませんで中学受験で慶応の付属小の方に入りまして、そのまま入学試験なく、高校大学進学をしまりました。そして、平成9年1997年に三菱信託銀行に入りまして、こちらには3年ほど居りました。ソフト、代ゼミの創業者はソフトですね。仕事したいなということで三年目代ゼミに入ったんですけれども、すぐに留学をしてこいという鶴の一声でアメリカのペンシルバニア大学というところに留学をいたしました。こちらで教育学の中にあるんですね大学経営学という分野で修士号、博士号というものをいただいております。このペンシルバニア大学というのは、慶応とですね、ちょっと似ているところがありまして、実学重視というところがあるのと、実業家だったベンジャミンフランクリンが創立者なんですけれども、アメリカの100ドル札こちらの肖像になっておりまして、まあ一万円札の肖像画福沢諭吉と似てるところがあるかなと思っております。ベンジャミンフランクリンの残した言葉で、教育が一番良い投資なんだと、そんな言葉も残して。

アメリカというんですね、日本がテスト社会なのに比べて、そういう圧力が弱いんじゃないかとイメージ持たれる方が多いんですけれども、アメリカも結構なテスト社会であります。高校進学、特に私立の高校に進むためにはSSATという試験がありますし、大学には二つ大きな統一テスト、SATそしてACTというテストがあります。大学院に行くための統一テストとしてはGRE、それからビジネススクールであればGMAT、法科大学院であればLSAT、メディカルスクールであるMCATというものがございます。実は、私、このテストを使ったビジネスの研究で論文を書いておりまして、留学してから3年目4年目こちらの方に没頭しておりました。そういう意味で色々なテス

トについて詳しくなつたつもりなんです、ある時大学の本屋さんで棚を見ていたらですね、見たことのないテストを見つけてしまったんですね。CATというテストでございました。これって何のテストなんか見たことないぞ、と今までの研究に何か穴があったのかな、大変不安になって、その本を手にとったところ猫の写真集でございまして、かなりリサーチ研究に消耗してですね、キャットと見てそれがテストに見えてしまう、そんな時代でございました。まあ何とかかんとか卒業博士論文調べまして、ロクターの方をいただいたという経歴でございまして。その後色々な役職をいただきまして、学校法人、予備校運営しております学校法人の副理事長あるいは塾を経営している会社の役員等を務めてございまして、対外的にはグループの共同代表ということでお仕事をさせていただいております。普段はですねえ今日もこの有益な駅前ビルにおるんですが、そちらで執務してございまして、実は三角形の敷地に五角形のビルが載っておりまして、ちょっと不思議な形をしてるんですがやはり塾予備校の本部でございまして、子供達の合格のためにビルの形も五角形とこのギャグは多分一度もこれまで受けたことがないのでYouTubeの向こう側で失笑が漏れているんじゃないかな？という風に思っております。いつもこの建物にいるわけではなくてなるべく全国の学校そして海外の学校を回ってですね、現場のお話を聞きたいなという風に心掛けております。今年そして昨年は新型コロナウイルスの関係でですね、なかなか訪問の件数は食えなかったんですが、2019年には海外を含めまして180を超える高校の方をお邪魔をさせていただきました。その中で田名部高校には五月お邪魔をさせていただきました。日帰りで東京からですねお邪魔をしてなかなかの行軍だったんですが、市長にもお会いさせていただいて、大変良い経験をさせていただきました。それからプライベートでは子供が3人おりまして、上の子供達は9歳男女の双子でございまして、昨

年1月に次男の方が生まれたということでございます。それからもう一つ大事な家族がおります。え？柴犬の源太っていうものがおります。大変気が荒くてですね、私しか散歩に連れて行くことができないので、今日もこれから書いてですね散歩に連れていこうかなという風に思っております。それから私のパートナーは、今グループの方で国際教育事業部の責任者をしております。略歴書いておりますけれども実は外交官の娘でございまして、20年余り海外で生活をしております。1歳の誕生日はパキスタンで迎えて、日本の教育は一年しか受けていないと。そして、それぞれの国で学事の暦が違うので気が付いたら二年早く大学を卒業するということが非常に変わったキャリアを積んでおります。外資系のコンサルティング、それから金融機関にございまして、結果的に教育関係の仕事に就いてもらっているということでございます。やはりこれだけですねあの私と教育バックグラウンドが違いますといういろいろ発見がございまして。2014年ですかね、軽井沢に新しくインターナショナルスクールができるということでその話を聞いて家に帰って今度こういう新しい学校ができるような話をしました。そのインターナショナルスクール、実は一学年八十人と聞きまして、私にとっては非常に小っちゃい学校だなと。慶応高校実は十八クラスありまして、大体1学年の820～830人。それはもちろんスタンダードな大きさだとは思わなかったんですが、それにしても80人は小っちゃいだろうと。その話を家に帰ってきたんですが、家内はですね、世界中のインターナショナルスクール通っておりまして、1学年1クラスは当たり前だと10人15人の学校なんていくらでもあるよ。80人それは大きいねえ。そんな話は家でございました。1学年80人こういう事実には変わりはないんですが、見方によってそれがとても小さく見え、とても大きく見える。そんなことが日常茶飯事起こっておりますそういう意味で、今日のお話の大きなテーマの一つになりますが、多

様性、色々な視点があるというのは大事なんだろうな。そんなことを思っております。そして、グループの沿革でございますが、私の祖父が1957年に代々木ゼミナールを創立をいたしまして、大きなポイントとしては、89年ですかね？衛星を使った代ゼミサテライト授業というものをスタートしました。近年EdTechということがよく言われますが、テクノロジーを使ってどう教育に生かしていくかということなんです。我々としてはそういったものの先駆けという風に自負をしております。そして、その衛星授業を始めた頃に別の創業者たちが、サピックスという塾を創立をいたしまして、そのサピックスという代々木ゼミナールが2009年からグループ化をしてきたということでございます。様々なビジネスを展開してまいりましたけれども、改めて振り返ると教育のニーズが非常に多様化をしてきている。それに対応してきた年月かなという風に思っております。その教育ニーズの多様化というのは色々な準備が早く早く始まる、低学年化ということと、グローバル化が進んでいる、この二点かなという風に思っております。そして、合わせてICTをどう使っていくかということで、さまざまなものを展開してまいりました。2021年はそのオンライン系のお話が並んでおります。この中で新しく色々なことにチャレンジをするという中でデジタルラボを解説し、これまで対面だけで行っていた塾の授業をオンラインで配校する。そして、代ゼミもこれまで映像授業は配信しておりましたが、自宅で完結する新しいオンラインコースっていうものを開校しました。やむを得ずスタートしたという部分はありますが、もしかしたら地域格差そういったものは是正のお役にも立てるんじゃないかなってそんな可能性も感じているところでございます。グループとしては幼児教室から高卒先までお預かりを誘っていただいているところでございます。一方の代々木ゼミナールが中核のブランドでございまして、私の祖父がよくこんなことを申し上げ

ました。予備校の講師というのは色々な役割があるんだと。そういった理事長自身も教育者であり経営者だったなという風に思っております。実は彼はアカデミックな世界に進みたかったんですが、家庭の事情で神主になりましたえーそういった経験がまあ戦後代ゼミをを創立するきっかけになった訳ですけども、そこにはあの学問への憧れと子供達への愛情があったのではないかなという風に思っております。さらに、彼は新しいもの好きでございまして、衛星を1989年、大きなパラボラアンテナを使って配信を始めました。畳20条あるですね非常に大きなものでございまして、それを同時に8チャンネル控え室にもよりますけれども、こういったテレビ局と同じ仕組みを使って、各代ゼミの校舎に配信をしております。当時はですね、大教室の授業を大教室で見ってもらうという仕組みでございました。ここはどんどんどんん発達してまして、オンデマンドで個別で見る、こういったことはこう世間でも非常に浸透してきたのではないかなという風に思いますし、今はさらにそれが自宅でも見るができるということでございます。こうやって写真を並べるだけでこの三十年の技術の進化というのがご実感いただけるんじゃないかないう風に思います。

さて、元東大総長の濱田先生が、教育の本質は多様性である。そんなお話をされてらっしゃいました。そのお話を聞いた直後にですね、私共の顧問の養老猛司先生が濱田総長そんなこと言ったんですよっていうことを言ったらですね養老先生ちょっとクスッと笑って、いやそれって生物の本質は多様性と言ってるのは同じだよねえ。そんなことをおっしゃってました。そういう意味で私共の本質も多様性、バラエティ豊かな講師陣が授業をする。それを色々な形で生徒達が楽しむというところからという風に思っております。ところで、代々木ゼミナール地名ですけど、代々木という木があるかな。実は明治神宮の中にございまして、大きな大きな木の木と、この大きな木が代々この地にあった

ということで、代々木という風に言われております。

(画面上で)これが明治神宮上空から撮った写真でございます、実は矢印の下に私共の代ゼミ校舎がというものがございます。実はですね、明治神宮の森は伊勢神宮、日光東照宮とは少し異なっております、照葉樹だ、自然の生態系を再現するような形で植えられております。そういう意味では秋には母が色づいて落ちるといのが明治神宮の特徴でございます、永遠の森というコンセプトがございます。そして大事なのは、いっウジングや日光東照宮に象徴される経緯はなくて、多様性、そういったことを我々体現していきたいという風に思っています。そういう意味で私ネクタイ、今日もそうすけども代ゼミカラーのネクタイを毎日しております。これ私のクローゼットの中なんですけども赤いネクタイだらけという言葉がございます。ただ赤いネクタイでは都合もございまして、お葬式に赤いネクタイという訳に行きませんのでえ一少ない冠婚葬祭用のネクタイと一本だけすねえ謝罪会見用のネクタイを思っております。もし私が青いネクタイをしているところを見かけましたら、何かやってしまったんだなと同情していただければという風に思います。

で、このグループの中で今まさかり高校お手伝いをさせていただいております。あの鍼高校については常に色々聞き及びかもしれませんが、でもえ？地域の学力向上えそしてし不足を解消しようという目的がございます。特にですね地域に必要な人材はその地域で育てる。そういう観点から医学部学科あるいは東大のような難関大学を目指す、地元の高校生を支援するプロジェクトでございます。まさまり高校の名前の由来はですね、まさに下北半島がまさかりのような形をしております、高校生の故郷に対する愛着、醸成したいという風にお聞きをしております。我々私どもが今どういう形でご支援しているかという、2017年八月から授業の方をスタートしております、今年からは年に

三回講習会を実証させていただいております。それから東京にいらっしゃった際にはですね、代ゼミから先程の明治神宮の隣の校舎に来ていただいております。それからコロナ禍では、オンライン見て、授業を継続させていただいております。授業はこんな感じですね。非常に子供達集中して授業を受けていただいているのがお分かりいただけるのではないかなという風に思います。で、その成果としてこのプロジェクトにご参加いただいた生徒さんが現役でまずは国立大学の医学部医学科に合格をし、昨年度につきましては東京大学理科Ⅱ類に大塚さんが合格をいたしました。田名部高校から30年ぶりの東大合格ということで、まさかり高校ということで、記事の方がウェブサイトに掲載されておりますので是非ご一読いただければなという風に思います。右側の写真ですね、市長の方に挨拶に行ってくす玉割ったところになっております。30年ぶりに東大合格というのはですね、ご本人の努力もそうなんです、あの学校側としても大変大きなことではなかったかなという風に思います。例えば東京の開成のような進学校であれば、校内の模擬試験でまあ大体ラインにいれば東大に分かるだろうな先輩はこの時期にこういう勉強してたから自分もそういう時期になったらそうやろうえ？そういう形で東大に対してですね色々な物差しがあるんですが、30年ぶりの合格ということになると恐らくご指導されている先生方え東大に合格した生徒さんを主導する経験というのはま？ほとんどなんかまあそういう中で手探りで指導があったんじゃないかなという風に思いますがまあそういうところにですね私共応援させていただいたというのは大変嬉しく思っております。やはり、首都圏の塾を展開して私が言うのはなんですけれども東京大学にはそういう首都圏の進学校からの合格者が増えておまして、大学はもうそれに対して危機感を持っております。是非ですね多くの地方の公立高校出身の皆様にも東大にいただきたいなとえそんな思いを持っているとこ

ろでございます。

さて、いよいよ本題の高大接続改革でございますが、当初はですね教育改革の行方ちょっと表に出ているものでお話をしようと思ったんですけどもえこの五年ほどですね、非常に近くでこの改革を見ていて色々疑問に思うことがございましたえ、何でこんな風になってしまったのかなえそれを皆様と共有することでえ！改革にあたってはこういうところに気を付けた方がいいということも共有したいなという風に思っております。元々高大連携改革はかなりですね大掛かりなお話としてスタートしました。当時の文部科学大臣に下村さんは日経新聞のインタビューの中で、単に今ある共通一次試験それからセンター試験の改革ではないんだ。明治以来の知識偏重暗記型教育抜本的に改革するんだ。そんな旗を振りました。ただし、話の進み方は非常に船頭が多くてえ難しいところがありましたね。元々は教育再生実行会議というところで提言がされ、それを文部科学省が受け取って今度は中央教育審議会に諮問し、そこから答申を今度は有識者会議で、そこを練っていると。これだけ船頭が多いとですね、どこに責任の所在があるので非常に分かりにくい。そんな印象がございます。オリンピックが国であったりと、都であったり、事務局であったり色々な組織がありましたけども、それに少し似たところがございます。元々ですね、去年から始まりました新テストにつきましては、大学入学希望者学力評価テストという名前がございまして、三本柱が三つございました。まず、一発勝負がいけないから、複数回実証しようじゃないか。そして、今のセンター試験、それからその前の共通一次試験っていうのは知識偏重だと。ついては5教科5科目、総合型で思考力を測るんだ。そんな話が出ました。それから、マーク式がいけないんだ。もっと書かせなさい。そういうことが指摘されました。で、実はこの三つは、矛盾を抱えておりまして、文部科学省の担当者に直接お聞きした時に認めてらっしゃいました。例

えばですね、複数回を実施をするためには違う母集団で違う試験をやっても同じようなスコアを出さなきゃいけない。そうすると項目反応理論というそれぞれの設問の正答率に合わせて問題を変えていくというようなことが必要になって、理想的にはコンピューターを使った試験というものが必要になります。一方で五教科5科目の新しいテストをやれば蓄積した正答率のデータがない。いうことで、複数回実施と矛盾してしまう。そして、記述式になると〇か×という採点であればいいですが、部分点をつけてしまうと項目反応理論が使えなくなってしまうということで、この三本柱同時にやるのは難しい。という風に分析をしておりました。文部科学省の担当者の方にお聞きをしたら、その通りだ。矛盾あるんだ。ただ色んな関係者がいて、色んなことを言うからとりあえず入れてあるんだ。こういうことをおっしゃられてました。ただ、当時のメディア、振り返るとですね、これが矛盾があって同時にはできないものだという風には捉えておりませんで、実現は難しいだろうけどもやるやると言ってますよね。当時そういう論調でございました。こういう矛盾点に続いておりましたので、その後の改革の中でも我々としてはできるだけ、これはできるんですかということを繰り返し繰り返し文部科学省大学にセンターの方にお話をしまいいりましたけどもお考えていこうに進むああいうのが平易ですねでございますで実は今年イベントで別の文部科学省の担当者とお話をする機会があり、高大連携改革っていうのは大学からやってほしいという話でもなかったし高校の現場から出た話でもないですね。直火でぶつけてみました。それに対するその官僚のお答えはそうなんですよ。政治なんですよ。反対すると反対意見を言うと左遷されちゃうんで何も言えないです。ということで今回の体格を省内ではインパル作戦と呼んでいますというお話がございました。オリンピックの開催に当たってもかなり強硬に進んでいくということで、インパル作戦も同じ構図

がありました。じゃ、インパール作戦、ここはちょっと長くなってしまいますので、被害が非常に大きかった無謀の作戦ということでリスペクトさせていただきたいなと思うのですが、その中でそう言うものがあつた日本軍の戦略の策定にございます。このインパール作戦もこれはあの対話に反対する人たちも何を行っても無理だこういう空気に包まれてしまうという。激論がなされても、無理という空気によって決められてしまうということがありましたで、このインパール作戦、今回の高大連携改革の共通点多々ございましたのでまとめてみました。批判的な意見の排除ということでインパール作戦の時は作戦に反対した指揮官参謀は更迭をされております。さらに、現実を無視した作戦ということで、まあ当時の日本陸軍、補給を軽視をするということで、例えば荷物を積んだ家畜を必要して食べればいいじゃないかと、そんな無理の作戦を考えていたと言われております。それからうまくいかなかった場合の不足事態が起こった場合のプランがなかった。とにかくプランAでやりきると。更にうまくいかなかった時の中止の決定が遅れて被害が大きくなった。そして上層部は特にこの責任を取らなかったという風に言われております。更に大きな犠牲を払ったわりには戦況に対する影響は非常に小さかった。戦略が乏しかったという風に言われております。じゃ、例えば今回の高大接続改革英語の四技能を評価しよう、そして記述問題を導入しようという時に、ただ共通点があります。まず批判的な意見の排除ということで、高大接続システム会議の中には、東大のですねテスト理論の専門家がいて非常に分かりやすくその理論を意見を上げられたんですが、これ一切無視して進んだという事実がございまして。更にですね、インパール作戦のように現実を無視したということで、試験会場がまだ決まっていない四技能試験を使うという風に発表されたり、まだ実装されてない人工知能で採点すればいいじゃないかとか、最後採点員が足りなくなるという話になった時

は、退職した教授を使えばいいじゃないかと、色々現実を無視した方法が繰り出されました。更にうまくいかなかった時にどうするという事は一切検討されずに、とにかくやるんだということで突き進んだ。更にですね、四技能試験の見送りは第一の身の丈発言を受けた後の批判を受けてですね、英語の成績提供システムというこの四技能試験を使うためのシステムの申し込み当日その朝に発表されたということがございました。高校の先生方は生徒たちから申込書を取りまとめ間違いがないか確認し、さあ持っていこうというところで中止になったということがございました。今回のもろもろの技能評価それから記述式問題の撤回に関して誰が責任を取って辞任したということにはございません。明瞭な責任の取り方なのかなという風に思います。さらにですね、もしやっとなして、あの限られた実用の記述式問題で思考力が計れたかどうかは疑問ということで意義もあまりなかったんじゃないかなという風に思っています。

実はこのインパール作戦というのはあまり教科書に取り上げられることはございません。高校の日本史世界史では出来事間の因果関係、あるいはその後の歴史に与えた影響を重視します。そういう意味で戦況の転換点になったミッドウェー海戦あるいは本土空襲のきっかけとなったサイパン島との陥落についてと比較した場合に、このインパール作戦は影響がなかったので取り上げられない。実際過去20年間で大学の入試で取り上げられるということはございません。教科書についても一冊のみに記載があると。でインパール作戦の教科書に乗らなかったように、今回の改革の失敗もこのまま行くと歴史から消し去られるのではないかなということで、非常に心配をしております。なぜこういう風に高大接続改革がうまくいかないのか。1つのヒントは、ストール大学の刈谷先生の言葉にやろうかなという風に思います。ここでは入試の改革ではなくて、大学改革についてのコメントでございまして、えーご紹介をしたいなという風に思

います。こういった改革がうまくいかないのは、明治以来の現実ルールよりも理念が先行する演繹政策志向によるものだ。キャッチフレーズそれを下していくだけで現場を無視しているのではないかという指摘でございます。これは元々日本の近代化の出発点に遡るんだと。現実を丁寧に見てそこから見た事実から何かで引っ張り出す機能的な思考をするではなくて、先にある海外の制度理念を抽象的に理解して翻訳解釈で日本に適用してきた。抽象的な理念から現実を下ろして演繹と現実から抽象化する機能の行ったり来たりをするというのが社会的科学の考え方なんだけど、そうではなかった。法学部の卒業で国土交通省にいらっしゃった市長さんの前でこの話をするのは大変恐縮なんですけど、カリヤ先生の言葉を借りると法学的思考を基礎とした日本型寛容先に根差した思考様式が良くないなという指摘でございます。

さらに文部科学省の問題としては、竹内先生の指摘がございます。なぜ教育改革は失敗するのかという文書の中で、文部官僚は他の行政官僚と比べると専門技術に対する知識の基盤が弱いと。専門的な理論武装して色々な圧力に跳ね返すことができないなという風に言っております。例えば、財務省経済産業省は、経済学を理論で人を説得するんだけど、そういう意味ではなかなか素人が口を挟めない。ところが、先程申し上げたように教育は誰でも経験があつて物が言える。それに対する議論が非常に貧弱だ。こんな視点がございます。そういう意味では、これから色々な改革進んでいくと思っておりますけども、是非現実に即した、キャッチフレーズに振り回さない改革というのが必要になってくるんじゃないかなという風に思っております。

それではちょっと東京大学のお話をしていきたいなという風に思います。その前に、今日本の進学率がどうなっているかおさらいをしていきたいなという風に思います。まず、高校への進学率ですけども、通信制に在籍する生徒さんが増えているというのは最近の記事にもなっ

ておりますが、それも含めると男性で98.7%女性で99.0%ということで、ほぼ100パーセント近く、高校に進学しているという状況でございます。1950年代はですね、女性の方が低かったんですが、1969年に逆転をし、それからは、わずかながらですが女性の方が高校の進学率は高くなります。一方4年制大学につきましては進学率が男性で約57.7、女性で59.9ということで女性も50パーセントを超えております。男女差のピークは実は1975年でございます、この時は28.3パーセントの差がございました。それが徐々に徐々に縮まって行って今6.8パーセントぐらいまで縮んでいるというところでございます。この差が大きかった頃の選択肢として女性の場合短大を選ぶ二年制の大学を選ぶという方がたくさんいらっしゃいましたけれども、実は1994年14.9パーセントをピークにここは下がり出しているということで、現在男女ともに四年制大学の方に50パーセントを、超える人たちが進学をしているという状況でございます。しかしながら、東大はその女性の比率が低いということで、浜田総長が在任時に多様な学生の構成を実現したいということ、2020年までに女子学生比率を30パーセントにしたいと、2010年に策定をいたしました。しかしながら、2019年の学部入学史、上野千鶴子先生が現代に関わるお話で話題になりましたけれども、その中で女性の比率が2割の壁を越えていないと指摘をされました。実際経過を見ますと、なかなか17.4パーセント、2019年一番高いところでもすぐ19.8パーセントということで2割の壁を抜くことが出来ませんでした。しかし、今年ようやくですね過去最多21.1パーセントということで、過去最高になったということでございます。

さて、ちょっとお話変わるんですが大学ランキングというのが非常に注目されております。東大が何位になったかということで、よく記事になるんですが、2012年から15年までは

アジアの一位、全体では23位だったんですが、その後順位が下がっておりまして、アジアの一位ではなくなっております。今年はですね、順位を一つ上げて35位、1位のオックスフォード大学からキングスカレッジロンドンまで国別にですね、まずこそをカウントしてみました。そうするとですね、アメリカが全体の五十七パーセント、2位のイギリスは77パーセントということで、4分の3はアメリカとイギリスの大学ということでございます。アジアは、中国から3校、シンガポールから1校入っておりまして、東大はアジアで5位ということになっております。このランキングはですね、色々批判がございまして、教育のクオリティ、研究をですね数値化して並べることに意味があるのかということで、私も留学中にですね、実は博士論文でこのランキングを研究したい。指導教授に行った時に反対をされたという経緯がございまして。アカデミックス、学問の世界にいる人たちから非常に評判がある。そのことを、2019年の週刊文春の中で、一番の池上さんと当時京大の総長だったら山極さんが対談をしていて、このランキングというのはイギリスの教育ビジネス戦略なんだ、こんなことをおっしゃられて、授業料の話がこのランキングには含まれてない。そういう意味では日本は授業料安くていい教育をしていい勉強してると、こういうことをおっしゃって。実際このランキングは研究教育論文引用等があるんですが、授業料の高い安いというのはポイントになってない、ということでございます。イギリスってなかなかしたたかだなあと思うんですね。このタイムズハイヤーエデュケーション、イギリスの出版社なんですけども、最初はですね、アメリカの大学を1位にしているんです。ところが実は2017年からえ今年も含めて5年連続イギリスの大学がトップになるということで、いきなりイギリスをトップにすると色々言われるので、こんな策を弄したのかな。そんな風に思っている。さて、このランキングで東大より女性比率が低い大学がい

くつあるか、東大20パーセントちょっとですけども、それより低い大学がトップ35大学に幾つあるか数えてみましょう。一番低いスイスの大学でも30パーセントということで、東大が30パーセントを目標にしていますけれども、すでに多くのトップの大学ではそのレベルではないということでございます。34大学の内、実は21大学が女性比率が半分以上ということで、これが世界の常識になっているということは知っておく必要があるのかなという風に思います。あの日本の常識が世界では非常識。先程申し上げた私の家の中でそれを実感することが多々あるんですが、視野を広げる違う視点から日本を見るということが必要なんだろうなと。そんな風に思っています。ちなみにですねこの大学ランキングでは男女比という言い方にはなっていません。女性の方が頭に来る。そんなレーション。そんな比率になってるんですが、アジアで先程日本の大学は5位だと申し上げましたけども、じゃあ他のアジアの大学はどうなのか？何となく文化圏が似ているので男性の比率が高いんじゃないから思っておりましたけども、香港大学は女性が54パーセント、シンガポールはフィフティフィフティ。北京大学でも46パーセントということで、これが世界の常識になってる。ということ、是非皆様と共有しておきたいなという風に思っています。

そういう意味で、まさか高校を通じてですね、東大の多様性に少しでも貢献できているんじゃないかなという風に思っております。これは東大の歴代総長並べておるんですが、全員男性。これ当たり前のように見えますが、ハーバード大学あるいは私が卒業したペンシルベニア大学はもう女性の総長おります。そういう意味ではこの男性ラベルが並んでいるというのは世界から見たら、なかなか違和感があるところでございます。それから東北出身の総長は佐々木剛先生がいらっしゃるんですが、その後は富山高校そして最近武蔵、麻生ということで、私立の学校が続いております。小宮山先生が象徴

になっているんですけども、卒業した六十三年というのは、都立の学校の合格者が非常に多い時期でございました。そして濱田先生は68年の灘のご卒業ですが、この年は実は灘が東大の合格者の数を日比谷を抜いてトップになった年でございます。そういう意味で、影の力ではないですが、卒業生がたくさんいる高校からまあ総長が選ばれているということを見ると、首都圏一極集中に今なってる東大の合格者というのを変えていかないと、地方の目線、多様性が失われていくのではないかなと心配をしております。

ちなみに今回の総長選挙の二次候補者は、開成、麻布、学芸大ということでやはりその当時東大の合格者が多いというところでございます。決して皆さんが何か偏ったお考えをお持ちだという風には思いませんけれども、どうしても、似た環境の中で育った仲間としている中で色々なバランスが欠けるんじゃないかなということを心配している。

じゃあなんで多様性が大事なのか。個人的にも視点が違うところが世界が違って見えるということを実感しておりますし、それを研究として実証されてる方がいらっしゃいます。色々な視点が違うことが問題解決予測に役に立つ。特に課題が複雑な成熟な社会では、その多様性が問題解決に大きく貢献をする。課題が単純であれば、どうやって解決するんだと話し合うまでもなく手掛けてしまえばいいんですが、複雑に絡み合う問題では色々な視点から考えた方がいいということでございます。ただし見え方が違う、考え方が違う、その中で一つの解決策を出していくためには、それぞれから論理的な話をして、コミュニケーションを取って答えに至る。そういう意味では、コスト、時間、手間は掛かります。そういうことを惜しまないでやるということと、論理的に考えてそれを伝え合うえそして新たな答えを導きだす。そういう力がこれから必要になるだろうなという風に思います。ちなみに、今までペーパーテストを中心に行っ

ていた東京大学は、2016年から推薦入試をスタートしております。今後ペーパーテストがなくなっていくのか、あるいは推薦入試のような様々な尺度から生徒を通っていくのか。この辺は皆さんと議論していきたいなとそんな風に考えてます。

さて、教育を取り巻く環境一つの変化はテクノロジーということで、GIGAスクールで一人一台端末を持ってということが現実のものになってまいりました。実はアメリカでは非常にテクノロジーを使った教育が進んでおります。先程ボーディングスクール留学のビジネスを私どももスタートしてるんですが、色々学校にお邪魔する機会がございました。タブレット電子黒板を使って授業をやったり、生徒たちは一人一人がタブレットを使って授業を受ける。こんなサイエンスなどなんかにお金をかけております。あの見ていただくとお気づきかと思うんですけどアメリカの学校って教室の雰囲気それぞれ全然違うんですよ。日本の学校であれば教室一つのデザインがあるんですが、非常に教室のデザインそのものの多様性がございますので、多くの学校プライベートの学校にはですねこういうラボ、3Dプリンタ、3Dカッターが置いてあったりしますで、こういったものを使ってですね、実際に色んなものを作ったりします。お気づきでしょうかね？これ左の奥にあるのは実は戦艦大和の模型でございまして、なぜここにこれがあるのかは謎なんです、実際に手を動かしてやっていると。これは高専の生徒さんなんていうのがよく参加される、ロボットの大会ですね。そういったものに参加をしている子どもたちの様子です。こういうところもですね。アメリカのレベルが高い学校ほどこういうロボットコンテストも強いという傾向がございまして。これある学校のラボにストリーム書いておまして何かなと思ったんですけども、よく日本でもSTEM教育ということが言われます。そこにアースを加えなければいけないので、STEAMで、そこに今はロボティクス、ロボ

ットも入れなきゃいけないということで STREAM ということが言われるようになっていいる。これ西海岸の学校なんです、非常に大きな、こういうロボットを作ったり、場合によってはですね、飛行機。これ、模型じゃないんですね。人が乗って飛べる飛行機を自作しております。この学校ではこれが 2 機目だそうでございます。1 機目は売れたと言っております。高校生の作った飛行機に乗るとか買うとかってのは、なかなか日本ではイメージしかないんですけどもそういったダイナミックなアメリカの教育の現場はあります。

なんでアメリカの学校がこうやって色々なことをやらせてるのかな？疑問だったんですが、ある時ふと気付いたことがございます。テクノロジーとの出会いがイノベーションの源泉になるんじゃないか。これ世代論なんですけれども、よく日本では 76 世代という風に言われます。あのよくメディアなんかにも出ていらっしゃる皆さん今四十代の半ばでございます。これ私、非常に実感がありまして、1974 年生まれなんですけれども、就職活動の時は葉書を書いて、企業に送って資料が届くということをやっておりましたが、もしかしたらこの人達はそうではないんじゃないかなという風に思っております。

先輩方を見ると 55 世代、スティーブジョブズから始まってですね、本当に有名な世界を変えるようなイノベーションを起こした人たちは、フェイスブックのマークザッカーバーグなど 86 世代がいるんですが、各世代何があるか。それぞれ高校大学の時に新しい技術と出会って、パソコンであったり我々の世代だったり、ウィンドウズ 95 です。私は学生時代ウィンドウズ 95 を使わずに就職活動ができて、就職しましたけども恐らく 2 年下の学年はインターネットを使った就職活動が始まっていたのではないかなという風に思っておりますし、マークザッカーバーグの世代であれば学生時代に 아이폰 手にすることができた。若い時にこういう技術でいじっていたものがやっぱイノベーションに

つながるということではないかなという風に思っております、是非日本の教育現場でも何か色々なものが触れる、それはオンラインで何か没頭するというよりは、実際に手を動かして何かもう課題解決をするということが大事なんじゃないかな？という風に思っております。一さて大学のランキングの高いえ？高校では色々なテクノロジーを使っているというアメリカの言動をお伝えしましたけど一方で中等教育には様々な課題があるという風に言われていいます。えアメリカの子供のどのぐらいの比率が軍隊に入るレベルに達していないえいうものでございまして、例えば高校卒業しない前科があるしていてもお基礎的なテストができない実は四分の三が該当するというので安全保障の観点からこれ非常に大きな問題になっています。同じ記事からですねアメリカが雇用を喪失して競争力情報面で戦うために何が必要か。それが今は十分ではないのでしっかりやらなければいけない。いかがですかね、科学、数学、工学。そういう意味ではSTEM というものにこうやって何が大事か。日本でも注目されているプログラミングなのか、読解力なのか、いやいや倫理道徳なのか。実はこの十年前のレポートでは、基礎的な読解力が大事だということを言っております。実はこれ当時私、読んで意味があまりよく分からなかったんですが、あるプロジェクトを通じてその大事であるということに今気付きました。実は新井紀子先生という人工知能の研究者が国立情報研究所で開発をしている基礎的な読む力を測るです。リーディングスキルテストというものを開発をして、私共も問題の作文、あるいは試験会場のご提供でお手伝いをさせていただいております。このプロジェクトはなぜ始まったかと言うと、実は前身のプロジェクトがございまして、人工知能で東大の入試問題が解けるかというプロジェクトでございます。センター試験でいい点数を取って、今年ぐらいにはま東大合格させるのが目標でした。私共の模試を受けていただいたんですが、どうもこれが

難しいということが分かってまいりました。なんで難しいか。今のAI技術では、東大合格難しい不可能か。読めない。読解力をあげるのが難しいので、一旦諦めました。一方で難関の私大、有名私大。そういう意味では日本の高校生の平均よりは上のところでは合格できそう。読めない東ロボくんは、それでも日本の高校生よりいい点数を取れるということは、もしかして日本の子供達を読めていないんじゃないか、そういうところからこのリーディングスキルテストというものを開発をいたしました。ちなみにですね、英語苦手だと。読めないということだったんですが、センター試験レベルだと合格点が取れるということが分かってまいりました。で、国語についても英語についてもテキストのデータが少ないので、なかなかスコアが伸びないということだったんですが、世界中の中等教育の英語のテキストというデータベースがアクセスできるようになって、それをAIに読み込ませたら急激に点数が伸びた。少なくとも選択式の問題では解けるところまで行ったということがございます。そういう意味では、日本の大学入試センターの英語の試験、何か受験英語と批判されることもありますけれども、そういう意味は世界の中等教育における英語と同じレベルだということが、ここから言えるのではないかなとそんな風に思っています。じゃこのリーディングスキルテスト、どんなテストなのか。これも公表されている問題なので、ご覧になられてる方もいらっしゃるかもしれませんが、仏教は東南アジア、東アジア、キリスト教はヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニア、イスラム教は北アフリカ西アジア、中央アジア、東南アジアに主に広がってる。オセアニアに広がっているのは何何であると。これ耳で聞くとですね情報量が多いので今なかなか難しい問題かもしれませんが、紙に書いてあって鉛筆でこうやってスラッシュを入れていけば、さほど難しい問題ではないのかなと思っていたんですが、正解のキリスト教を選べた子供達は半

分しかいなくて、実は仏教を選んではる子供達が三分の一以上だということで、なぜ読めないのか、非常に話題になりまして、仏教問題という風呼んでおります。係り受けすら理解できていないって、そんなことがまた分かってきた。そんなテストでございます。今は主に企業様にご採用いただくケースが多いんですが、最近では自治体からのお問い合わせも増えているというのが実情でございます。お話を聞くとですね、例えば今回のワクチン接種に関わる厚生労働省からの手続きの処理が非常に分かりにくかったと。実は、各自治体の職員の皆さんが読めてないんじゃないかという危機感を持たれた首長の皆さんからお問い合わせがあったという風に聞いておりますけれども、読めないと仕事ができない、読めないと一人で勉強ができない。仕事が多々新しくていくな中で、読むというのが一番の基本になるということで、これからの子供達にこの読む力というのが求められていくんだらうな。そんな風に思います。そもそも教育って何だろうと改めて皆さんも考えてみたいという風に思っております。ブリタニカの百科事典で、教育の定義、たくさんございます。この中で皆様がそうだなあと思う定義でございますでしょうか。教え育てること、知識技術を教え授けること、などなどなどでございます。これ保護者の目線でもしかして行政、学校の先生の立場で違って見えるかもしれないんですが、教育エデュケーション、エデュケート。語源はラテン語だそうでございますして、接頭語のE、EXと同じ外へ、そしてこの真ん中の部分ですね、こちらは導くという意味でえ？合わせて外に導く、中にあるものを外に導き出すこれが教育だという風に言われております。しかしながら、教育基本法に定められた教育の目的は、またちょっと違う観点で捉えられております。実は明治時代にですね、教育をどういう風に表現をするかということで初代文部大臣の森有礼と福沢諭吉がやり合ったと風に聞いております。で、この初代文部大臣の森有礼が言って

いる教育というのは、どちらかと言うと今の基本法に伝わるものがあるんですけども、福沢諭吉は子供達の才能を引っ張り出すことなのでそれは教育ではなくて発育とすべきだと。こんな風に言うておりました。この観点は今後の教育改革の中で改めて見直されてもいいのかなという風に思っております。で、先程出てきた京大の総長だった柳谷先生とユニクロの柳井さんの対談の中で面白いコメントがございました。人間は何々しないから動物と違って進歩した。人間は動物よりも親離れが遅いので辛抱したのか、人間は群れるんだけど動物と違って人間は群れないから動物と違って進歩するのか、それとも諦めないから進歩したのか。実は正解は諦めないでございまして、生物学的にはこの諦めないってのは結構厄介なのか。俺らチンパンジーは駄目なそれを受け入れると。その方が本来は効率的なんです。柳井さんがそれでは進歩できないですよ、と、言ったところ、だからこそ進歩ができたんだと。世の中予想できないことが起こるんだから、それに対して諦めない人がいたから進歩できたということを言われております。今の教育改革は将来はこうなるんじゃないか、だから今こういうものが必要なんじゃないかという議論をするんですけども、果たしてそのアプローチいいのかな。こういうのは思うところがあるところでございまして。このあと山極先生にお会いをしてお話をする機会があったんですが、動物と人間の教育の差ということをお聞きをしました。動物の中で教育的なことをするのは、肉食動物と猛禽類、鷲とか鷹ですね。こういった動物、鳥は子供達に物の取り方を教えてあげる。例えば先に捕まえて弱らせたものを持ってきて、それをとる練習から始める。取り方を学ばないと子孫が育っていかないので。まあそういうことです。しかしながらですね、それをやるのはメスだけだそうでございまして、雄はそういうことをしない。限られた動物、肉食動物、それから猛禽類のメスが子供達にそういうことを教えない。人間が違うのは

ですねえ子離れ、乳離れしてから一人立ちするまで非常に時間がかかる。その期間に一緒のコミュニティにいる人たちが色々なことを教えないといけないということで、人間は教育ができたというお話でございまして。そういった生物学的な人間の進化についても改めて見直していくべきではないかなという風に思います。

最後、よくスクールに行きますと、コンフォートゾーン、快適なところから飛び出せということが言われます。普段と同じコンフォート、楽なところに居心地のいいところにいるとなかなか伸びないそこから出てチャレンジをすることで、成長する。ただし、あまりストレスをかけてしまうとそれはパニックゾーンになるので、こういった学校ではいかに子供達を少しストレスのかかった状態に置くかということが大事だということのようでございまして。日々仕事の中でも自分としては、こういったことを意識して、新しいことにチャレンジしたいなという風に思っております。代々木ゼミナールの日どころ決戦、受験生に対する言葉な訳ですけども、仕事の中では日々新しいことに挑戦しよう、そんなことを思いながら仕事をしているところでございまして。

以上、駆け足になってしまいましたけれども、私のお話いったんこちらで終わりにしたいなという風に思います。ご清聴ありがとうございました。

3. ディスカッション

事務局： それでは、ディスカッションに移らせていただきます。

このあとの進行は、むつ市総合教育会議議長であります宮下宗一郎むつ市長にお願いしたいと存じます。宮下市長お願いいたします。

宮下市長： 高宮さん大変勉強になり、ありがとうございました。

私自身、今の話を受けて考えていたのは、レッドゾーンに常にいるなという気持ちがあるのと、演繹型政策思考そのものでやってきている気がして。ただ、最近は現場とか実際に政策が動くときというのは、やっぱりダメで、いろんな人の意見を聞いて、実際の政策に出来たかどうかがうまくいくかどうかの鍵になる。今回コロナの事でも私自身痛感しているところです。高宮さんの話からすると劣等生ですが、唯一同じ事がありまして、謝罪会見用のネクタイを私も持っています。そういう立場なのかなと思って、お話楽しく聞かせていただきました。ありがとうございます。

私の方から1つ質問してみようと思っていて、質問の内容としては、試験学力を身につけさせるというのが、基本的には、代々木ゼミナールの大きな柱だと思っています。試験学力を身につけることによって得られる多様性のある子ども達の未来、これをどう評価されているのかということをお話しいただきたい。

その前に私がこの(市長の)立場になって、むつ市の教育を見たときに、思っていることを少し話させていただきます。

第一に、昨日もそうだったんですが、むつ工業高校のボート部の子が全国で5位になったということで、表敬してくれたんです。体もかっこよく、爽やかで、ボートに真摯に向き合って、その結果として全国で上位になって。私その話を聞いて本当に感動しました。でも、そういう子ども達は1年を通じて何人もむつ市長表敬訪問に来るんです。ところが、勉強ですごい成績を摂った子というのは1人も来たことがない。それは必ずしも、みんなが成績良くないということではなくて、1つには地域全体でそういう子ども達をどう育てるかという視点があまりにも欠けている気がします。全国どこでもそうなのかもしれません。そういう部分がいつも疑問に思っているところです。

もう1つは、地域課題はたくさんありますが、今現状課題を解決する担い手の一人としてもち

ろん市長がいるんですが、今出来ることしか出来ないんです。将来にわたって地域の課題を解決したいときに解決するのは、子ども達しか居なくて、たとえば、いま、医師不足という課題があるとすれば、地域からドクターたくさん輩出するしかないんです。私が出来るとは、医師を招聘したりとか病院のネットワークをうまく活用して様々な遠隔医療を進めるとかが出来ても、根本的に解決できるのは子ども達しかいない。一次産業のこれからの隆盛のこともそうだと私は思っています。地域の課題を解決するためには、長期的に考えれば、子ども達しかいない。

3つ目の疑問は、多様性を認めない教育というか、そういうことがむつだけではないですが、当たり前前に30年間繰り返し行われている。何かといえば、教科書開いて、板書して、それを写させて。今は、タブレット導入しているなど、多少変わりましたが、自分が授業を受けたときと同じようなことをやり続けられています。いまの、世の中って100%という答えがない時代で、答えみんなで搜しましょってなっている時に、そういうことをやり続けることが、果たして教育として意味があるのだろうか、という思いがすごくあって、新しい教育大綱というのは、しっかりとした形で、皆さんの意見を踏まえながら、現場がしっかりとワークするように作ってきたいという思いがあります。

今日の議論の中でも根幹だと思いますが、教育というのは、子ども達の多様性を保証するもの。将来にわたって保証するものであってほしいと思うし、その結果として、むつ市、下北、青森県、日本が発展する礎になるものだと理解しています。

そういう意見を踏まえながら、試験学力を身につける事によって得られる多様性ある未来、これをどのように評価しているのかについて、お話しただけですでしょうか。

高宮氏： 実は来週同じテーマで、お話をしな

ければならないです。受験と多様性の両立というテーマです。外資系の金融機関の保育園のママ友さんから、声をかけられまして、外資系の金融機関でお仕事されている皆さん、インターナショナルスクールに入れてみたりなど、いろんな事にチャレンジするんですが、受験の教育に戻っていて、受験勉強が多様性を削っていくのではないかという中で、私に声をかけていただいて。日経新聞とのイベントの中で記者さんの方から多様性が大事といつつ、受験産業というのはどうなのかと言われているのが事実で、今、その答えを模索しているところで、教育機関としての学校と塾との差は、予備校というのは、限られた時間の中で結果を出すということで、試験対応ということがメインになっていくというのはそのとおりと思っています。

教育の話をした時、先ほどサイエンス、因果関係を突き詰めてやりましょうと話したのと、もうひとつ、エンジニアリング。限られたリソースをどう配分するかが大事です。そういう意味で日本の教育は今課題が浮き彫りになっていますが、一方で、限られたお金と人の中では、一定のレベルを維持することが出来たという意味では、評価されるべきだったんだろうなと思います。これから教育改革をしていく中で、教育にいくらかけられるんだと。かけられる人と予算の中でどういう結果を出したいんだ。そのためには、どういう形がベストかという議論をしないといけないだろうと思っています。

高大接続改革は、上から理念の話をしてきましたけれど、それに対してお金の話はサイバーサイドで出てきて、記述式を入れる、リスニングを入れる、そうしたら資金量を当然量らなければならないが、資金量の話は出てこなかった。例えば、記述式を採点するには、1台いくらかかるが、それ

に対してこういうデータが取れる。ならばこれだけお金をかけましょうと話についてこない。そういう意味で、教育の分野でお金の話をするのはタブー視されてきました。そこは避けて通れないことなんだという風に思っています。

試験学力については、批判をいただく事も多いですし、大学の関係者からも受験対策しないでほしいと言われるのも事実ですが、それでも基礎的なことをしっかり身につけるといのは、大事なことだと思っています。基礎的な力、計算する力、漢字の力が土台になって次のステップに進んでいくので、それなしに、タブレット与えて、何でも情報を取れるよ。だから、覚えなくて良いんだよ。というのは危険なことではないかなという風に思っています。自分の中で体系的なものを持っている事が大事になるんじゃないかと風に思っているところです。

宮下市長： 子ども達にしても、親にしても、強がらないんです。いま、因数分解勉強して、それがなぜ自分の多様性に将来につながるんだ。例えば、4大文明を勉強して、インドはヒンズー教で、イスラムはイスラム教で、キリスト教はこの辺で興って、大体どれ位前だと勉強しても、それが、自分の将来につながるのというイメージがわからない。言い過ぎかもしれませんが、勉強する意味というのが中々見いだせなくて、勉強が好きになるとか、勉強する方向に行かない。その点については、代ゼミの講師というのは、5つくらい芸者とか役者とかあって、私も先生方の話を聞いていると、すごく良く、勉強以上にその学問としての数学とか国語とか英語に興味湧いてくることあるんですけど、そういうことを含めてどういう風に考えていらっしゃるんですか。

高宮氏： 古き良き、昭和の浪人文化みたいなところがあって、子ども達の背伸びをしたい、そういう教養的なものの香りを嗅ぎたいということども達に対して、高校の教育を超えた話を予備校の講師が話をして、それが非常に受けて、勉強のモチベーションにつながってというのは、常時よく聞きましたし、××な人たちも郷愁を覚えるというのはあると思います。確かに世間の風潮としては、そういう話を喜ばずに、「それって試験に出ないですよね。」「どうやれば良いんですか。」というのが風潮としてはあります。保護者もそういう傾向が強くなっていて、答えをすぐ欲しがる。先ほど、グループの中で幼児教育から大学受験までと言う話を申し上げましたが、幼児でやっている算数の基礎になるものって、常に100に出さないこと。例えば掛け算が出来るようになるとか、九九を覚えるようになるとかではない、算数的な考え方の基本になることをやっている。例えば、ヤカンを見て、こっちから見たらこう見えて、むこうから見たらどう見えるんだろうね。最初はそれを見てもらう。それから、向こう側に回らなくてもそれがイメージできるようになれる様にコツコツやっているんですけど、これって保護者の立場からするとすぐに数値に表れる結果にならないので、「何でそんなことやっているんですか。」となりやすいんです。将来役に立つんですよって話を講演会でやって終わって質問に保護者がいらっしゃった時に、「何をすれば良いんですか。」となって、子ども達も保護者達もすぐに答えが出るもの、すぐに点数が上がるものを欲しがる風潮はあるんだと思います。

そこは、教育ビジネスをやっている立場で言うと、そのニーズにも応える。本来の教育的なところも応えていかなければならないということで、バランスは難しい。

もう一つ具体的な話をしますと、昔の予備校のテキストって、答えを渡さなかったんです。

授業の中で説明するので、答え付いていなかったんです。子ども達答え欲しいと言わないんです。結果的に答え配るようになったのは15年くらい前ですね。本当は答え配らずに、授業聞いて、その中で解決してもらいたいですけど、それだと不満な子ども達がいるので、4回に1回まとめて渡していたのかな。そんな感じになっていたんですが、知的耐久力というんですかね、問題があって、すぐに答えが分からないとモヤモヤするんじゃないですか。子育てもそうだと思うんです。これでいいのかなってモヤモヤしながら毎日暮らしていくんですけど、それが不安だから塾に行って授業料払っているのよって言われるとそこまでするんですが、親もすぐに答えを知りたいし、子ども達のその傾向があるんですが、そこを我慢できる力が付いていくと、社会に出た時に良いんじゃないかって思っているんです。

宮下市長： 授業の中での工夫とか、システムとして勉強に向かう仕組みを作っていっちゃるといふのを肌で感じていまして、このノウハウをどこまでという部分がありますけれど、私たちとしても参考にさせていただきたいと思います。

今日、むつ市の教育委員の皆さんにも来ていただいておりますので、それぞれから、コメントや質問を承りたいと思います。

まず、田中委員お願いいたします。

田中委員： はい。あの本日は本当に興味深い話として、多方面からですねあの息を大きく今度は現場できましてよく心から感謝しております私あの実はあの読みで習うという言葉を聞くとうすね高校二年生の時に今から大体48年ぐらい前なんですけども、夏期講習に行きました。それはあの田名部高校というのは先程の高校なんですけど、そこからあの家のおじさんおばさん達がですね、あの色々大学とかで経験したことで、

とにかく外を見てこいと言われて、何も知らない中で東京に夏休みに行って連日38、39度という大っきいと思う体験して大変なところだなと思いつつながら夏期講習を受けた記憶がございます。これは多分その私に外を見てこないと分からないよという風なことで私を行かせたんだと思います。そこで勉強してこいという意味ではなかったんです。その後結論としては浪人しようと思ったんですけども、それでですね先程の多様性についてなんですけども、教育のニーズ低年齢化グローバル化に対してということで、家庭環境に対して私は非常に重要なアプローチをする必要があるのではないかと思います。私がおじさん達にとにかくそれを見てこいというようにこれから先その子供達を教育する場合に家庭環境、親御さん達にその低年齢化とかですねグローバル化をうまく説明して行って、そしてその流れに載せなければ、そのある年齢以上になってしまうと手遅れになってしまう気がするんです。そのためにどのような教育環境の中であの指導していけばいいかというのをお聞かせていただければと思いますよろしくお願ひします。

高宮氏： ありがとうございます。あのインターネットで色々情報が取れるようになってもしっかりそこに行かないと学べないということはあると思いますし、あのそういう世界があるんだよということをお子達に伝えていくというのはとても大事な事かなと思っています。制度的な話で言うとですね、大学を地方にもたくさん作ってなるべく地元で高等教育で受けられるようにしようというのが実は文部行政でございます、ある県から外にでなければいけない比率っていうのがどんどん下がっています。外に出て大学高等教育を受けるというピークがバブルの頃と重なるんですね。当時は先程の団塊世代の話ではないんですけども、子供の数も多かったんで浪人しなきゃいけないとか東京に出てくるあるいは大都市に出なきゃいけないというこ

とだったんですけども、文科省としては一生懸命地元でもそういうことができるように推し進めていった。ところがある時期に内向けだと、外に出たがらないっていう風に話が変わっちゃったんですよ。恐らくえっと教育大を出られた先生なんか学校の先生になりその地元しか知らない方が増えてくると、東京に行ってあるいは大都市に行って勉強プラス何かを経験するということの価値を伝えられなくなってくる。かつ今、定員に合わせた子どもの数になってくるとわざわざ行かなくてもいいんじゃないか。インターネットでも事足りちゃうんじゃないかっていうことで、その同じコミュニティ内向きのコミュニティの再生産ということが起こりつつあるんじゃないかなという風に思っていて、そういう意味で出ていくことの価値というのをやっぱり伝えていく必要っていうのはあるのかなという風には思っております。質問の趣旨と違ったのかもしれないですが、先程の我々の海外進学のところにご相談に来られる方が、やっぱり何かしら海外と知っててというのがあった方が、その良さを子供達にもさらに伝えたいという気持ちが多くて、外を知るともっとその外を知りたくなるみたいなことを、どういろいろなご家庭で作れるかっていうのは課題かなという風に思っています。そこに今度、経済的な話が入ってくると、なかなかこう、私共だけでは解決しきれない部分があるんですけども、やっぱり外を見るときももっと見たくなるっていうものをこうシステム化、こう大きく作ればいいのかという風に思います。

田中委員： はい、ありがとうございます。確かにあの田舎にいますとですね、行くだけの交通費を考えてもなかなか現実に現実的ではないということもありますので、まその辺はサテライトということもあると思うので、色んな形でですね、ご家庭にそういう情報を届けるというシステムを作る必要もあるのかなという風に感じましたどうもありがとうございました。

宮下市長： ありがとうございます。じゃあ黒木委員お願いします。

黒木委員： 長時間どうもありがとうございましたお疲れ様です。

黒木と申しますよろしく申し上げます。えっと質問というよりちょっと感想を幾つかなんですけれども、先程のその保護者が、さっさと答えを欲しがるとかっていうのが非常に象徴的だなと思うんですけど、結局もうその保護者であるところの大人がまるばつ教育の成れの果てになってるんで、思考力滑った転んだっていう話がほとんど意味あんのかっていうまあ絶望的な感想をちょっと一つ持ちました。そもそも高大接続でしたっけ、いわゆる大学入学試験改革で、改革っていうのはすごく耳障りがいいっていうか甘やかさな言葉なんで言えばその下村某とか、そう言った人が何かいい感じになるんですよ？いい気分。だけど本来改革っていうからには行き先が決まってるべきじゃないはずで、その行き先が実はよく分からないんですよ。要するに行き先がどこにあるかによって、それに対して手段が決まるので、要は合目的な手段選択が必要になってくると思うんです。もしそれが思考力を付けるということならば、それに応じた手段が選択されるべきだし、創造性をつけるっていうんだったらそれっていう風にこう決まるはずなのに、行き先が全く、要は改革の目的が全くはっきりしてないんで、一番子供が迷惑してるだよなっていう風には思います。さもありなんだと思ったのはやっぱり基礎物価い力の話がアメリカの教育に付随して出てきましたけど、今日本でもその何ですか、ピサとかっていうテストの結果を受けて読解力がえーと世界二十番目とかぐらいに落ちちゃって日本の子供の読解力が非常にこう低下しているということが問題になっているらしく、そこをどうにかしようという風になって！いるらしいんですけども、結局それって国語能力なんじゃない

のっていう風に思うんですね。先ほどの問題で、オセアニアは何？宗教的には何宗かっていう、ある意味問題に書いてある訳じゃないですか。それも読み取れないっていうのは、要するに国語能力が異常に下がっているということなんで。それに対して現実の文科省が主導する教育が全くそれを目指していないとか、ここの時間増えていったっけ、英語とかなんか増やしちゃってよく分かんない国語を強化してる感じじゃないぞっていうのが、前々から思っていた通りだなんていう、正直な感想を持ちました。それとSTEM、STREAMっていう話がアメリカの教育で出てきて、全くその通りだなと思うんですけど。私ちょっとこれ質問なんですけど、ちょうど大学に入った頃にコンピュータっていう授業科目があつて、そこっていわゆるプログラミング言語としてコボルだの、C++だのBASICなど、なんかそういうのをそうやって私はその単位落としたんですけど。要はそういう時代でしたんでまあそうだったわけですよ。だけどその後例えばアップルがマック出したり、グラフィカルユーザインタフェースが導入されてブラックボックスみたいなプログラムを読んでg o t oだのなんかそんなコマンドを入力したりする七面倒くださいことはいらなくなったんですね。みんな喜んだ僕らの世代は。みんなあのアップルのマックを買ってという時代だったんです。それが何か知らないけど、最近数年前ですけど、二三年前ぐらいから小学校からプログラミングが教育科目に導入されるとかっていう話を聞いて、ばかじゃないのってちょっと僕思ったんですよ。いるそれ。せつかく文字で済ませられるようになったのに、プログラミングなんかいるかい、ていうのが正直な感想で、さっきのSTEMとかSTREAMの中にプログラミングなんか入ってないじゃないですか。もう入らないよね。そういう人はここに居て、その人がやってくれればいい仕事であつて、それって全然ICTとは関係ないんだけどなっていう風に思ったんですけどその辺はいかがで

しょうか。

高宮氏： ご指摘の通りで、プログラミングについてはですね、何か課題解決したいと。その時に使うツールではあるので、それを最初からやる必要あるかって言うとえと疑問視される方が多いです。特に私の周りで言うと人工知能をやっているような人たちはまあ言語ってどんどんどんん流行りは変わっていくので、それをやる必要があるのっていう意見は多いです。それよりも数学が大事それから物理がないしこれは人工知能の関係者が共通して言うことですね。結局ある現象をモデル化するのが物理なんですけども、実はAIはこれ非常に苦手なんです。そういう力をやっぱりそういう人達は見ているということで、プログラミングについてはっていうのはあります。一方で、プログラミングを色んな人にやらせたい人たちって時々天才一人見つかる。天才一人見つかるゲーム会社とかめっちゃくちゃ儲かるので、とにかくそのために投網をかけたっていう実業的な部分とただ学問的にちゃんとやる人たちはそれは別に後でもいくらでもできるんでそれよりは数学とか物理とか考え方をしっかりした方がいいですよっていう考え方ですね。なので、今のこの時代だから全員がプログラミングみたいなことでみんなにヨードンでやらせるっていうのはちょっと違うんじゃないかな？っていうのが僕の考え方なんですがいかががでしょう。

黒木委員： よく分かりましたって言うよりも、いや同感です。ということですね。以上です。ありがとうございます。

宮下市長： まあ現場のプログラミングっていうのは、どちらかと言うとコンピュータのと言うよりはむしろ論理思考のあのプロセスをこうやっていくっていうことに尽きているので、まあそういうものなのかなっていう風に私自身は考えています。

じゃあ長岡さんよろしく願いいたします。

長岡委員： 長岡と申します。本日はありがとうございます。あの感想なんですけれども、私は1975年生まれなんですけれども、自分自身の受験をしていた当時の常識と今の受験を取り巻く常識とのギャップに大変驚きました。やはり自分の常識を子供に当てはめてはいけないんだな。特に受験に関するっていうところは。胸に胸が痛いえそんなこう感想をいただきました。

私から一つ質問なんですけれども。大変虫の良い質問かもしれないんですけれども、やはり地方においては、社会経済的地位と言うらしいんですが、ソーシャルエコノミックステータスが低い家庭がどうしても多い、比率的に多いという風を感じています。そういう中でこのSNSが恵まれていない子供が東大に合格するために、親はまず何が一番必要なのか。そして、お子さんは何が一番必要なのかということをもしお答えいただければ大変ありがたく思いますよろしく願いします。

高宮氏： あの塾の立場でこれを言うのはあれなんですけども、自分で勉強する力が付けられるかどうかってのはとても大きくてですね、世の中に塾に通わずに東大京大に受かっている人達がいって、おしなべて自分で勉強ができるんですよ。できなきゃ受からないんで。例えばですね通信教材だけで受かる人って僕は非常に何人かあったことがあるんですが優秀なんです。それ自分でペースメイキングできるっていうこともそうだし、答えを見た時に模範解答見た時に、じゃ俺はこれをこう直せばそれに近づくだなっていうことができる力だと思えるんですね。すいませんあの近くに新しいサービスを出している仲間がいるんで言いたくないんですけど、我々の記述式の問題をAIで採点するっていうサービスをスタートしたんですね。学校の先生も、あれ採点するの面倒くさかったからありがとうって言われるんですけど、それって機械がや

っちゃってここ間違ってるよって教えちゃっていいのかなって、実は疑問に思ってるんですね。というのは自分が書いた答案と模範解答を見て、これだったらこのぐらいいは合ってるんだなあとか、ここを直せばもう少しいい点数になるんだなっていうことを自分でやるから力がつく訳で、そういうことができるようにしてあげると非常にそういう意味では受験対策のコストは安くなる。例えばですね、漢字を小学校低学年で学びました。何かを書き取りして、最初は親が丸付けしてあげなきゃいけないと思うんですけど、答えを見て自分で丸付けできるようになったらこれ非常に強い。今はそれをAIがやってあげます。タブレットに感じ書いたら〇×点けてあげますよ。それをやり続けると自分で間違いを見つけて、修正するっていう力がどんどん弱くなるんじゃないかって非常に怖いんです。逆に言うとなんかそういうことを簡単なところから少しずつ積み上げていって、直していく力が付いていけば非常に有利になるんじゃないかなという風に思います。そういう子たちだけになっちゃうと塾予備校って潰れちゃうんでこの話はあんまり外ではしたくないんですけども。すいませんご質問には多分そうお答えするのがいいかなと思いました以上でございます。

長岡委員： はい、ありがとうございました。親としては、前の陰山先生のお話の中にもあったんですけど、東大に行きたいと子供が言ったら先生どうすればいいですかという質問に対して、行けるから東大受けなよと親がこう言ってあげることが大事だという風にお話がありました。やはり親も常識とかですなどうせやっても東大に入れないっていうような先入観を無くして、とにかく、子供のそういった力を培っていくための支えになればいいのかなというふうに思いました。

宮下市長： お答えありがとうございました。本題とは逸れますが、長岡さん何年生まれですか。

長岡委員： 1970年、昭和55年生まれ。

宮下市長： あの長岡さんは早稲田卒です。高宮さん慶応卒。先ほどの黒木委員は東大卒です。

本論とは関係ありませんがご紹介申し上げました。

納谷委員お願いします。

納谷委員： 先生、今日は本当にありがとうございました。私は保護者という立場で今教育委員をやらせていただいているので、このモヤモヤと答えが待てないという保護者の一人でもありまして、あの子供がこう勉強したりとかしている時もその早く答えを出すように出すようにってどうしても急かしてしまったりっていうのがありまして、こういうあのご講演いただくといつもあの反省しきりであの終わるっていうパターンが多くて。私もちょっと年がばれてしましますが団塊ジュニアの世代でありまして、保護者という立場で中学生と高校卒業した子供がいて、あのまさにまさか高校がが始まった時に子供もお世話になりまして、その時にあの子供の方に感想を聞いたら、やはりその学校の授業は学校の授業でももちろん素晴らしいですけども、学校の授業では受けられないえ授業というものをすごく新しい刺激をもらったっていう風にあの言っておりました。なので、ここでは受けられない体験できないことをその出来るっていうそのチャンスを子供達が受けられるというか与えられるというものを今むつ市があの市長はじめ一生懸命こうやってくださっているまた先生にもご協力いただいているっていうことにとっても感謝をしております。

冒頭で、80人の学校が小さいから大きいかっていうお話をされていましたが、むつ市の場合あの大規模後も勿論あるんですけどもあの複式で行っているようなあの本当に小規模な学校もありまして、その子供達は本当に9年間ずっと基本的には同じメンバーでずっと授業を受けまたテストを受けていくっていう形を取

っています。私が住んでいるところもあのどちらかと言うと、小規模というか1学年に1クラスの学校なので本当に9年間ずっと同じメンバーで授業試験を受けていくその子達はその高校受験、最初の受験が大体高校受験になるので、高校受験を迎えた時にいきなりいつもは20人30人また2人3人の中で試験を受けているのに、高校に出向いて行って受験をする時にいきなり100人200人の中で試験を受けるっていう、ただその受験というものに対しての緊張もありながらのもっとたくさんの人数の中で受けなければならないというプレッシャーとかそういうものを感じながら子どもたちが体験をしていくというかまた大学受験になるともっとそれがさらに倍三倍四倍の人数の中で受けていくっていうそのところがやっぱりこの地方の子どもたちとやっぱり都市圏の子どもたちの違っているのがあると思います。塾もむつ市内であれば塾あるんですけども、やっぱりちょっと外れたところだと全員が全員その塾に通って勉強するという環境でもないの、なかなかその外からの刺激を受けながらの勉強ができないっていうところもあって、あのまさか高校は高校生をやっているんですけど、また、これもいつも市長の方にもお願いばかりなんですけれども、出来ればその小学校とか中学校にもその学校の先生ではない、新しい刺激っていうのを子供達にこう日々与えていただけたら非常にありがたいなっていう風に思っています。

質問といふかなんですけども、ちょっと話は違うんですが先ほどあのタブレットとかで今子供達すぐもうタブレットで何でもやっぱりあの検索もできますし、答えもそれこそ導き出される状態で今言ってもう本当に親の私達よりも色んなことを知っていてで分からないとすぐこう調べてっていう風になるんですけど、自分のやっぱり時代としてはその英語の単語を調べるのにも英語の辞書の紙を開いてこう見てその前後をまた読みながら色々こう知識をつけていくってどうしてもそういう環境でいたのではな

かなかその自分も今タブレットとかそのインターネットを使って検索することが多いんですけども、その勉強においてそういう紙の媒体上でのその勉強とそのネットとかの環境でのその勉強っていうのを両方やった方が進めていった方がいいのか？今の時代そのインターネットとかの検索ですぐこう見れる状況なのでやっぱり子供達にとってどちらの方を進めていったらいいのかということをお伺いしたいんですけども。

高宮氏： あの英語の単語の意味を検索すると、ぱっと出てくるんですけど、結構ですね、違う順番で出てくるのがあって、それを選ぶ力を付けないと多分誤ったというか使い方が違うものをピックアップしてしまうんじゃないかなと思うんですね。その紙の場合は情報がしっかりやって一、二、三、四意味がたくさん出ているのでどの意味かなってやるんですけど、インターネットで検索しちゃうと最初は一番多いやつが、ぱっと出るってそれ以外のことは背景が出てこないんで。そういう意味では紙の情報量のあるものと両方使えるようにしておいた方がいいなとは思っています。あの娘のためにちょっと単語帳を作ることがあるんですけど、あれ何だっけこの単語って引いた時に、結構例えばある辞書の単語だとこれが出てくるのでこちらとこうだよなって違うケースが多くてで、それが実は学年が低い抽象度の高い単語ほど物理用語入れたらなんだったって同じ単語一日対応してるで戻ってくるんですけど凄く幅の広い子供達が使う単語の方がどう訳すかって場面によって全然違ってくるがあるので、そこの特選を分かって使わせることが大事かなという風に思っています。すいません英語の専門ではないんですけど、あの普段の生活ではそういうことを感じております。

宮下市長： あの小中学校のそのまさか高校のような取り組みについてはですね、実はあのちょっと一回初めて今中断している事業があ

るので、ご紹介申し上げたいんですが、まさか寺子屋という事業を二年前ですかねコロナになる前の年に初めて、これどういう事業かって言うとま夏休みにこっち涼しいので、今、東京大学と連携協定を結んでいまして、その運動部の人たちにこっちで合宿してもらって、合宿は昼の間に、夜はその子供達に勉強教えてもらうプログラムっていうのを構築しようとしていたんです。まあそのパイロット事業で応援団応援部が来ていただいて、応援部の子どもたちに、その小学生中学生も来ましたがねあの時は、勉強教えてもらったっていうことはあって。実は、去年から本当はですね野球部の合宿があつた決まっていたんですね。ところがその野球部の合宿決まっていたんですけどやっぱりなかなかちょっと受け入れ体制もコロナでできなくて、あの二年連続でちょっと難しいっていう状況になってまして。来年こそはですねお招きをして子供達に勉強教えてもらうで更に一回やってもその時はぐっと熱上がっても続かないこともありますので、オンラインなんかでもやり取りできる環境を作って、小学校の高学年ぐらいから中学生までもターゲットにしてですね、まさか寺子屋という形でまさか高校を広げていきたいなっていう構想だけは今ありますので、そこはちょっとあのこの中継見ている方々にもお知らせをしたいと思います以上です。

じゃあ教育長お願いします。

阿部教育長：今日は本当にありがとうございます。学ぶところが多く、そして勇気づけられるご講演でした本当にあの感謝をしております。

高大接続の話がありましたが、試験ですけれども改善するのであれば入りやすく卒業しにくい。そんな欧米スタイルの学校にしてしまえば一番簡単なのではないのかなと考えています。そしてご自身のお話に今日ありましたように受験学力をどう捉えるかという質問に対する問い

が決して詰め込みを目的としてはいない。そう理解することができました。これもとても意を強くしました。我々が求めるものは瞬間最大学力ではないですよ。知識ではなくてどう考えて何ができるかそんな人間にしていきたいそう考えていますので本当にそうだよな頷きながら聞かせていただいておりました。実は学校にいる時に実は中学校の教員なんですけれども、定期試験の時に必ず記述式の問題を作ってもらっていました。そして、今からえーと平成29年ですかね。あの高大接続で記述式の問題が国語と数学に問われる。そして、英語は四技能問われる。そういうようなことがぶち上げられた時にじゃあそれに対応するために高校の先生方をまあ高校の校長先生方を訪問させていただいて、うちの学校は記述式の問題やってるんだけど、これはこれからの対策ではないんだけど、子供の力を育てるために数を増やしたりあるいは分類を多くして配転を高めることと、そして採点基準をしっかりと作ってくれるこのことをさせ方をお願いしようと考えている。ただこの自分の学校の取り組みが高校に入ってから高校の指導と齟齬があつては子供のプラスにならないのでどうでしょうかって聞いて廻ったことがあります。いいんじゃないのそれで。続けなさい。っていう風にしてまそんなことやってたん？ですけれどもこの記述に関する質問が実は最後に一つあるんですけれども、その前にあの本当にあの記述式の問題っていうのは大事だし、それを鍛えるためには、そこまでは出来なかったんですけれども、指導者の側がしっかりと添削をして、子供に説明をしなければならない子供が書いたものを読み取った上で、子どもが納得できるような解を示してそして子供を育てていかなければならない。そして、それを聞く子供ができる子供が育てば子供達どうしてそうしたその指導が可能になるそんなようなものが本当の学力に繋がるんじゃないのかなと考えていたことがありました。実は私この地区では三十八年中学校の教員やっているんですけど

も、子供達は本当に一生懸命で頑張ります素晴らしい可能性を持っていると思います。そういう子供達に我々が何ができるかと言うと、将来を見据える力だったり、普段見ることができない環境を示してあげる。そんな風に未来に向かってあるいは他の地域を見るそんな広い視野を与えることではないのかなと思っています。広い視野を与えることができれば、子供達ももっと努力するようになるのではないのかな。もっともっと先ほどプレッシャーというご発言でしたけれども、子供達を鍛えることができるのではないのかな。そんな風なことを考えています。実はこの地区の教員も本当に一生懸命頑張っています。それが先程申し上げた子どもたちの姿に結実しているんですけども、もっともっと伸びしろがあると思うし、そして自分の校舎だけではなく、卒業後の子供達のことを、慮れば、もっともっとやるべきことが見えてくると思うのでそういう形で先生方と共に頑張っていきたいなと考えているところです。

最後に質問ですが先程申し上げましたように記述式の添削、これは非常に大事なのではないのかな。読めなければ書けなければ聞いて分かるように話をすることもできないのでそのように考えているのですけれども、そちらさんがあの指導にあたって記述式だけではないですけども指導のフィードバックについて、子供達に対して対する時どんなことに力点を置いてどんなことを考えていらっしゃるのかま簡単にお聞かせ流れればありがたいです。

高宮氏： あの今回記述式の試験の導入が見送られたのは幾つかの理由はあるんですけども、途中で自己矛盾に陥った部分があるんですね。採点する業者さんはトレーニングした人を使います。で、結局これ質問には答えなかったのですが大学生のアルバイトを使うってことなんです。そんなことできるんですかって言われたんですけど、一方で今の入試の仕組みだと自己採点をして自分は何点ぐらい取ったかをもとに質

問をするので、受験生はその採点基準表を見て採点できない。受験生自身が今日見て採点できるんだったら本当は大学生のアルバイトでできなきゃおかしいんです。でもこっちで自己採点できるようになって言いながら、こっちにはそうじゃないってことを言って話がもう空中分裂にってしまったということがあったんですね。あの質問の答えに対してはあのやっぱりレベルによってそこは変わってくるのでえーとま東大の記述式のための添削とまずその文章を読んで読み手のがこういう意味だと理解できるレベルのものなのかで、やっぱり随分レイヤはあるんだろうなという風に思いますけど。今、その東大を受けるようなこたつの中でもやっぱり課題になってるのは、キーワードを並べるだけというのが多くなって、これ実は人工知能的な書き方と我々呼んでるんですけど、人工知能ってなんとなくこの辺が出た的になんか重なってるからこれ回答でもらってんじゃないのみたいな感じでキーワード並べるんですけど、そこは今の受験生もそれが多くなりつつあります。そういう意味でそこを論理的にこう書くんだよっていう指導が多分、少なくとも大学受験レベルでは求められていいのかなと思うのでまあそこはやはり人間じゃないと使用できないですよ。っていうのが我々のスタンスでありますけども以上です。

阿部教育長： はい分かりました。大変ありがとうございました。

宮下市長： 今日は、時間もだいぶオーバーしましたが、多岐にわたる質問にも答えていただきありがとうございます。実はその高大接続っていう文脈かどうかはさておき来年からですねむつ市も青森大学のキャンパスがオープンします。でこれ地域にとって初めての4年制大学ということになります。多様性の保障っていう部分でいくと、昨年短大のキャンパスがオープンして、現場もう30人、40人の学生が行っています。

今回また青森大学さんがキャンパスをオープンしてくれるので、まあそういう意味ではトータルでいくと、4年経つということですかね百名以上の大学生短大生がこの地で学ぶことになるという部分でいくとまあ私たちの地域も多様性を多少ではありますがやっぱり保証しつつある。青森大学さんのキャンパスが優れているのはむつのキャンパスも青森市のキャンパスも東京にもキャンパスがあってそれぞれをこう行き来できるっていうことがこれありだ。ということでも非常にそういう部分でもまこれからむつ市と一緒にいい取り組みができるのかなっていう風に思っています。所得の問題もありましたが今は結構その消費税を財源として、ですねえ学費を全額免除するですかそういった、様々な所得保障っていうか補助制度があるようですのでそういった観点からもむつ市の子供達にも大きくチャンスがこう広がっているということだと？理解してます。そんな中で全然関係ない話ですけど高校が二つを一つにするとかまはつき言って論外なあの高校再編の議論もあったりするんですがまそれはさておきですね。今日やっぱり私の一番の学びは、やっぱり多様性っていう言葉、先程の話を聞くとキーワードがやはり地域にとって非常に重要だなということは改めてあの感じてえお礼しまして、そういう意味では、今日の様々なキーワードいただいた言葉もですねえしっかりと我々の今後の教育大綱に反映していきたいという風に考えておりますので、そのことを改めて高宮さんにお伝えをさせていただきたいと思えます。

今日の最後にあの一言我々に対して激励のメッセージをいただければと思います。よろしくお願ひいたします。

高宮氏： ありがとうございます。教育ってサイエンスとアートの部分があると思っていてですね。こういう仕組みだとこういう成果が出やすいとか、ころころなるっていう部分と、一方で一人ひとりの子どもたち違うので同じプログラム同

じカリキュラムでも伸び方も違うし出る結果も違うという風に思っています。先ほどこの人は何年生まれの何大学卒ですでそういうことを聞くとなるほどこういう感じかなこう今までの経験から予想できる部分と、一方でそれではこう割り切れないステレオタイプじゃない部分でも当然あって、その教育というのはあの全体の仕組みがしっかりしていないと駄目ですし、一方で仕組みだけでは対応しきれるものではないので、是非、サイエンスであり、アートであり、アートであるという意味は、一人一人がユニークであるということ、サイエンスということはこういう条件にすればこういう結果になるという因果関係この二つのバランスかなと思っておりますので、その中で私共のお手伝いできることがあれば、また引き続きお声がけいただければなと思っております。今日は本当にあの貴重な機会をいただきまして、ありがとうございました。これからもよろしくお願ひいたします。

宮下市長： ありがとうございました。

事務局： 高宮先生大変ありがとうございました。長時間ありがとうございました。

ディスカッションを終了させていただきます。

これを持ちまして第17回むつ市総合教育会議を終了させていただきます。なお、本日の協議内容経過については、要点をまとめたうえむつ市公式ホームページ公表することといたしますのでご了承願ひます。本日は皆様ありがとうございました。高宮先生ありがとうございました。